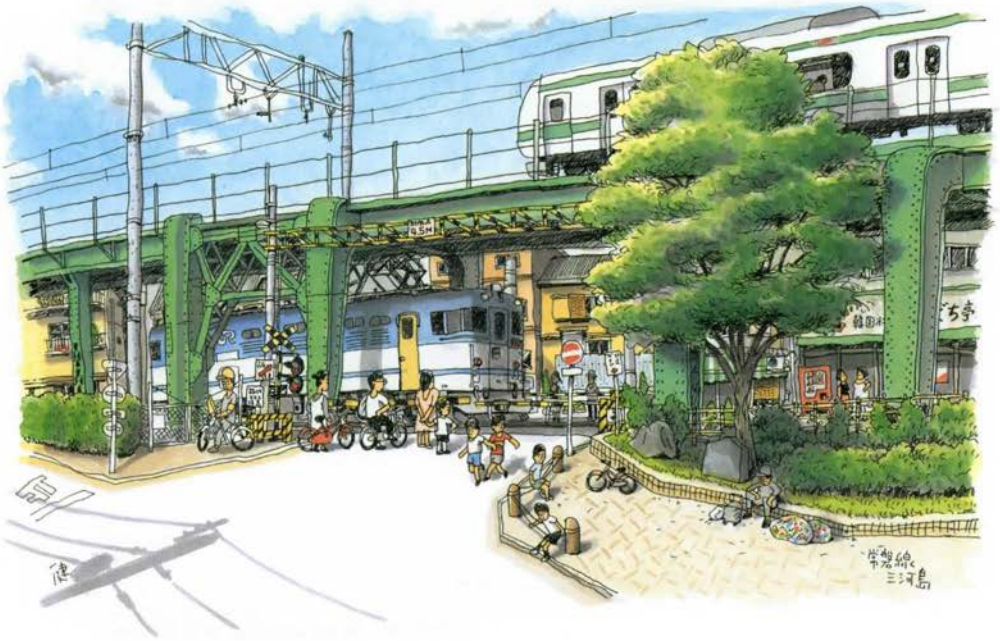


浄土

monthly
JÔDO

2012 9 September



駅

をめぐる
点景

絵

2012年の表紙

村上健

JR常磐線

三河島駅

島式ホーム1面2線を有する高架駅である。昭和の匂いのするこの駅の改札口は一ヶ所。乗り入れている路線は常磐線のみだが、本線のほか、田端駅（田端信号場駅）方面への支線（田端貨物線）と隅田川駅方面へ向かう支線（隅田川貨物線）が分岐する。これら支線はいずれも貨物列車のみが使用している。昭和37（1962）年、この駅構内で発生した列車脱線多重衝突事故は「国鉄・戦後五大事故」のひとつとして、そして二度と起きてはならない悲慘さにおいて、深く記憶されている。

9

月

浄土

2012/9月号 目次

原子力と人類	森 俊英	2
会いたい人 麻実れいさん①	関 容子	10
響流十方	袖山榮輝	18
連載小説 渡辺海旭	前田和男	22
極楽に帰った法然上人	石丸晶子	30
江戸を歩く	森 清鑑	38
誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	47
編集後記		48

表紙裏・ 駅をめぐる点景 村上 健

背表紙裏・ 泰雲の美味探訪



表紙題字=中村康隆元浄土門主

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

原子力と 人類

ステイブン氏から日本人へ

大阪正明寺副住職
総本山知恩院布教師
大本山知恩寺布教師

森 俊英

JR広島駅からタクシーで10分のところに、広島原爆資料館があります。その資料館の代表(注1)に、2007年、初めて日本人以外の方が就任しました。その人はステイブン・リーパー氏(アメリカ人・現在64歳)で、日本および海外において懸命に「平和」を訴えておられる方です。世界における原子力問題の最新情報と長年の思索をもとに、人類のあるべき姿を明確に提示されます。

6月15日、京都・知恩寺にステイブン氏を迎え、「人類は原子力と共存できるか」と題し講演をいただきました。その内容の一部をご紹介します、原子力の問題を皆さまとともに考えたいと思います。

核戦争の足音

現在、アメリカの経済は苦境にあり、対外的な支配力に影がさしています。そのように世情が不安定のなか、大国をはじめ複数の国が核兵器を保有し、もしくは保有を進めています。核兵器の存在によって、戦争は抑止されているなどとは到底言えない状況に、世界は陥っています。

ステイブン氏は、こう警告されます。

「もし、10の都市で10の水素爆弾が炸裂したら人類は終わりです。水爆から発した灰や煙は、成層圏にまで到達しジェット気流によって、10年間ぐらい地球を回ります。それは「核闇」と呼ばれるもので、太陽光の1割を遮ります。そうなれば、日本でも夏場に霜がおきるような低温となり、食物が作れなくなるのです。世界は食物の奪い合いとなります」



(注2)

講演会場では、これを聞いて衝撃を受けた人も多かったようです。なぜなら、日本から遠く離れた地域であっても、もし核兵器が使用されれば、日本人の生活が破滅的影響を受けるという事を知ったからです。

唯一の被爆国である日本にとっては、地球上のどこにおいても核兵器の使用は許せないことですが、どこで使用されても、日本を含む人類全体は地獄への道を歩むことになるのです。

ちなみに、世界には戦略核弾頭数は5500以上、核弾頭数は合計23000以上存在しています(2009年のデータ)。

原発の危険性と問題点

ステイブンの警告は、原発の存在にも及びました。

「戦争が起これば、原子力発電所が狙われることになります。原発が攻撃されれば、その国は大混乱に陥ります」

この警告も、大変おそろしいものです。いざ戦争状態になれば、人道的ルールなど無いに等しいことは想像に難くありません。また、福島原発事故の経験からは、原子炉はともかく、発電所内の使用済み核燃料貯蔵プールが攻撃を受ければ、もう想像もしたくない事態になることは明らかです。

「原発は地震・津波に耐えうるならば安全」とは言えません。ステイブンは原発に関する複数の問題点を挙げたうえ、次のように指摘されました。

「自然界のものは循環性をもっています。原発の廃棄物は循環性をもたず、その毒性は何万年・何十万年後まで残ります。核産業の人々は「50年後には解決する。循環システム構築、つまり完全な再処理は可能だ」と言いますが、今、それができていないのです。たいへん毒性の強いプルトニウムを未来の人類、地球に残すことになります。現代人に、そうした権利はありません」

つまり、放射性廃棄物の問題です。現代の私たちが、こども・孫の時代に、そうした危険極まりない物質を残すことは、許されないのである。

日本の判断

核兵器のおそろしさから、同じ原子力を扱う原発の話になりました。ステイブン氏の演題は「人類は原子力と共存できるか」で、結論はもちろん「共存できない」です。

ところで、現在の日本はどちらの方向に進もうとしているでしょうか。この講演の翌日（6月16日）、日本政府は福井県大飯原発3・4号機の再稼働を正式決定しました。

「当面は事故が起きない対策を可能な限りしながら、電力確保を図るのが現実的」

「節電に努力しても電力の安定供給が難しいのであれば、原発の再稼働も仕方ない」

と政府の判断に賛成される方もおられることでしょう。しかし、ステイブン氏の指摘にあるような、戦争時における原発の危険性と、将来への過失（核廃棄物）についてはいかがでしょうか。

政府の視点が経済のみに立脚しているのは浅はかなことです。さらには今後の核廃棄物処理問題、古い原子炉の廃棄費用、そして事故リスクを考えれば、長期的には経済的に

も原発稼働は得策とは言えません。

それでも、日本は原発との共存を選ぶべきでしょうか。

集団的合意の事例

再び核兵器の話に戻します。ステイーブン氏は、

「国際社会がまず取り組むべき課題は、核兵器の廃絶です。人類には海洋破壊、空気の酸素濃度の低下、地球温暖化など多くの深刻な問題がありますが、核兵器は、もはや我々の手に負えない状態にあります。核兵器の廃絶は、人類がこの地球上で生き続けるのであれば、避けては通れない試練です」

と順序立てたうえ、近年の国際社会の成果を挙げました。

「90年代に対人地雷禁止条約が結ばれました。ご覧になった人もあると思いますが、1992年ごろからプリンセス・ダイアナが毎日のようにテレビに出て、地雷被害の悲惨さを訴えていました。当時、その運動には60か国から1000を超え、NGOが参加していて、運動は世界レベルで加速し、ついにこの条約に153か国が署名（2007年）するに至ります。このプロジェクトのリーダーはカナダでした。」



そして2008年には、ノルウェーがリーダーとなり、クラスター爆弾禁止条約が署名されます。この成果には、前述の条約締結に注がれた人類の意識の高まりが大きく影響しています」

このようにステイブンは、人類の具体的成果と人々の意識（心の問題）に焦点を当てて、講演の結論へと導かれました。

リーダーが出れば

「さて、核廃絶です。核保有国もいつか核のない世界にしようと言ってきました。しかし、それは形ばかりのものにすぎませんでした。

ただし近年、保有国の国民にも意識の高まりが起ってきています。先述の90年代に結ばれた2つの条約の効果です。そして2009年、あの有名なオバマ大統領のプラハ演説に至ります。2010年から世界の多くのNGOが動き始めました。いよいよ、廃絶の時が来たかのようにも思えました。

ところが、そこから進みません。保有国自身はお互いにそこから進めないのです。廃絶への具体的枠組みの話になると、保有国自身が立ち止まってしまふのです。

つまり、リーダーの不在です。先に述べたプロジェクトを牽引したカナダやノルウェーのような、自然なリーダーが現れていないのです。核廃絶という分野の自然なリーダーは、誰でもできるものでありません。とても難しいことです」

ステイブンは、さらに語気を強めます。

「この超難関な課題のリーダーは、みなさん日本人だと私は思います。そして日本人しか

出来ないと思っています。理由はいくつもあります。

- ・世界で唯一の被爆国であること
- ・憲法九条をもち非核三原則の国であること
- ・平和市長会議の中心であること
- ・多くの国と貿易関係があること

そして、アメリカの親友であり、中国と大きなビジネスをしています。明らかに、日本がリーダーになるべきです。日本以外にその力をもつ国はありません」

世界の岐路に立つ日本

私たち日本人は、何から始めればよいでしょうか。まずは「原子力と人類」について深く考えることです。日本人が深く考えることを、広島原爆資料館の代表者でありアメリカ人のステイブン氏がサポートしてくださり、日本人がこのステイブン氏の活動をサポートするならば、きっと新しい道が見えてくると私は強く感じます。

さらには、人類が核兵器を廃絶するために「集団的合意」を経験すれば、それは歴史上、大きな意識転換をすることになります。また、それは「地球温暖化などの問題解決」という未来を照らす道につながる期待を有します。

ステイブン氏の講演は論理的で、しかも聴衆の情に迫るものでありました。講演終盤、願われるように語られたステイブン氏の言葉を紹介し、稿を収めます。

「私は1か月前、ウイーンで2015年核拡散禁止条約検討会議の第1回準備委員会に出席していました。そこでも核兵器に対する世界の考えは大きく変わりつつあります。今ま

でなく、核廃絶論が明確に論じられていたのです。

それから、今、世界は日本を見ています。大震災・福島原発事故で大きな打撃を受けた日本が、どのように立ち上がるのか。そして原発をどうするのか。これからも原子力と共存していくのか。

これほど世界から注目されている国はありません。日本は世界の真ん中にいます。みなさん、どうぞよろしくお願いします」

以上

【参考】

- 1、広島平和文化センターに関する情報
<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/pcf/index.cgi>
- 2、ステイブンの氏の著書『ヒロシマ維新／Hiroshima Revolution』グローバル・ピースメーカーズ・アソシエーション・2004年
- 3、ステイブン氏監修の書籍『NOW！』Project NOWI・2011年

【注】

- (1)ステイブン氏の正確な役職名は、公益財団法人広島平和文化センター理事長。広島原発資料館は同センターが運営。
- (2)「核の冬」宇宙物理学者カール・セーガンらにより提唱されたT T A P S理論。
1983年

連載

会いたい人 関 容子



麻実れい
さん

①

撮影／タカオカ邦彦

この六月、新国立中劇場で『サロメ』（オスカ・ワイルド）が上演されて、ヘロデ王夫妻を奥田瑛二・麻実れいが演じ、二人の洗練された長身の立ち姿が舞台を圧倒した。

終演後、奥田さんを楽屋に訪ねると、舞台人として場数を断然多く踏んでいる麻実さんには僕は随所で助けられているんだけど……どうしてあの大女優の話を聞きに行かないの？と訊ねられた。

舞台の神に愛される「男たち」ですつと行きたいので、と答えると、だって麻実さんは元宝塚の男役でしょうに、と一本取られて、今回のインタビューになった。

そう言えば私の中学時代からの友人、安藤紀子さんは熱烈な麻実ファンで、誘われて私もずいぶん麻実れいを観ている。ざつと思いついても『マクベス』『世阿弥』『双頭の鷲』『サド侯爵夫人』『メアリー・ステュアート』『桜の園』『獅子を飼う』『エンジェルズ・イン・アメリカ』『ハムレット』『蜘蛛女のキス』

『グリークス』『イサドラ』『蜘蛛巣城』『サラ』『オイディプス王』『箱根強羅ホテル』『黒蜥蜴』『現代能楽集』『夏の夜の夢』『かもめ』『山の巨人たち』『冬のライオン』『おそろべき親たち』『キネマの天地』そして『サロメ』……。

まだほかにもあるが、こうして挙げてみると現代演劇の名作を網羅しつつしているし、女優と生まれたからはこの中の一作品にでも主演してみたい、と思うような主役ばかりを独り占めしている。数々の演劇賞のコレクタ―としても羨望の的で、たとえば読売演劇大賞に限っても、その最優秀女優賞が二回、優秀女優賞が六回という記録は、当分破られそうもない。

女ざかりの四十五歳で立派な結婚相手に巡り合い、私生活も充実していて、こんな恵まれた女性には滅多にないだろう。

麻実れいさんが言う。

「奥田さんが『元男役』ですって？ すみま



1975年、『ベルサイユのばら』のアンドレ役を演ずる麻実さん（写真上の右）と'84年、『風と共に去りぬ』のレッド・バトラー役の麻実さん（写真左）。

せうん、誰よりも私、男っぽいものですから（笑）。でも女優というのはみんな男だなと思いますよ。まして私は九十五年間も宝塚にいましたから、まず役を作るときに性別の女を消してゼロ地点に戻るんです。それからキャラクターのアンドレ（『ベルサイユのばら』なり、レッド・バトラー（『風と共に去りぬ』）なりにいくわけです。退団して女を演じるようになってからも、私は同じですね。それぞれの女を作っていくわけです。私は背が高いせいとか、おかげさまで強い女の役ばかりが来て（笑）、中性的な感覚が必要な役だと、かなり助かります」

たしかにそのレパートリーを見てみると、マクベス夫人、サド侯爵夫人ルネ、黒蜥蜴など、女方の坂東玉三郎が演じる役と重なっている。まだ『天守物語』の富姫を演じてないのが不思議なくらい。

「玉三郎さんとも奥田さんとも、身長も年齢も同じで、お二人には同級生みたいな親しみ

をおぼえますね。『黒蜥蜴』に出演なさっている玉三郎さんをお訪ねしたときに、玉三郎さんの衣裳を着させていただきました。シンブルなデザインの中が深く開いている黒のゴージャスなドレスで、私もいつかこんなドレスを着て緑川夫人を演じてみたい……と数年前から思っていたのですが、その夢が叶いました。

サド侯爵夫人では私がルネで、玉三郎さんがサンフォン役で御一緒させていただいて以来、サンフォンも私の憧れの役となりましたし、夢って叶うものですね。奥田さんは『エリザベス・レックス』で、私がエリザベス一世、彼がシェイクスピア役で共演しています。エリザベスは実は男だったんじゃないか、というお芝居でしたから、これも私にぴったりでしたね（笑）」

麻実さんは昭和二十五年三月、東京、神田明神下の刀剣金具師の家に、三人姉妹の三女

として生まれた。

「うちは神田明神様の鳥居中にあつて、ちょっと高台になつて、東京じゃないみたいなの静けさの中で育ちました。崖の下にクラシックバレエスクールがあつて、お姉さんたちが、素敵に踊っているのを毎日眺めていたら一緒に踊りたくなつちやつたんですね。かわいい末娘、言い出したらきかない末娘のこと、通わせてくれました。3歳の頃から宝塚受験の前までバレエは続けていました。父は刀の鐔とか目貫を作る金具師で、いつも仕事部屋でコツコツ仕事をしてましたから彼の背中しか見てないんですけど、その背中から人に対する優しさとか、真面目さとか、誠実さとか、いろんなことを学びました。でも、あんなに勤勉で遊びも知らないような父が、ある日私に映画を観に行こう、って神保町の映画館に連れて行つてくれて『ウエストサイドストーリー』を観させてくれたんです。あとで聞いたら父はあの映画を三回も観た、って言うん

ですよ。もしかしたら父にもそういうものが好きだという血があつて、それが私の中に流れたのかもしれないんで、と思うんですね」

麻実さんが大好きだった父上は早くに病気で倒れ、十年程床に着いたまま七十二歳で亡くなつた。

「大人になつたら父と二人でゆっくり飲みたかつたな、と思ひましたけど……。父が亡くなるのと同じ頃にベルサイユのアンドレが決まりましたので、私の舞台姿は一度も観てないんです。母はずっと父の看病をして、七十八歳で亡くなりましたが、親孝行が十分にできませんでした。その代りに今は姉孝行はしています」

麻実さんを宝塚へと方向づけてくれたのが、その二人のお姉さんたちだった。

「宝塚が大好きで、よく観に行つていたみたいですけど、私が中学生のとき初めて寿美花代さんの『華麗なる千拍子』を観に連れてつ

てくれたんです。きれいだなあ、とは思いましたけど、幕間に食べた三色アイスクリームくらいしか記憶になくて（笑）、別にその後、病みつきになる、ということもなかったですね。高校の卒業が近づいて進路を決めかねていたときに、上の姉が宝塚（音楽学校）受けてみたら？ って。姉は自分の夢を妹に託したんだと思いますね。宝塚コースが一番楽かなと思ってましたけど、入ってみたら決して楽じゃなかった。

入学試験は東京と大阪の二か所で行われ、名札をつけた黒のレオタードを着て面接とオーディションをこなさなければならぬが、不思議と私は落ちない、と思いました。ですので、発表の日も回りの緊張とは逆にとても冷静でした。自分の番号を見つけても、『あー、あった』って冷めてましたね」

入学式に麻実さんはみごとに遅刻し、全員の注目を集めたという。

「下の姉の会社の寮が有馬温泉にあつて、そこに母と一泊して翌朝のんびり行っただけで、宝塚まで結構時間がかかったんです。それでもあわてずにゆつくり歩いていたら、あなた待ちなんだから急いで、って言われて会場へ入りました。そしたら私の席が一番前、成績順なんです。一番が小柳ルミ子、私は三番でしたが、でも最前列だから着席するまで全員が私を見るわけですよ（笑）。冷たい視線でした」

宝塚音楽学校の制服は、グレーのワンピース、大きな白衿のブラウス、グレーのジャケット、ワインカラーの蝶タイ、白い靴下に黒い靴だった。

「そこまではいいんだけど、ヘンな鉄かぶとみたいな帽子をかぶるのがいやでしたね。その日から寮生活が始まって、生徒には全員阪急電車全線のパスが与えられます。これは嬉しかったですね。」

音楽学校時代は、本当に良く遊び、良く遊



遅刻した宝塚音楽学校入学式当日の麻実さん。



び、良く遊びでした。おかげさまで、成績は急降下でした。その頃、駅の売店のオバちゃんに、あんたはほんまに宝塚の男役になるために生まれてきたような子やな、って言われましたけど、ピンと来ませんでした」

しかし、そんな麻実さんに男役に憧れる日が訪れる。

「宝塚歌劇団入団後の身体検査で大劇場の奈落にある医務室前に並んでいると、ちょうど月組の『ウエストサイドストーリー』が公演中で、素敵な男役さんが目の前を通って行くんですよ。その時初めて、宝塚っていいかも……、私も宝塚らしい男役になりたい、とやと熱くなってきました」

熱くなった麻実さんは当然のように頭角を現していく。

「春日野八千代先生も天津乙女先生も、雲上人みたいでしたけど、とても可愛がつてくださいました。研究課三年のときに日本舞踊の試験があつたんです。あとで春日野先生に呼ばれて、あんな、せめて振りだけでもちゃんと覚えなはれ、つて言われて（笑）、『藤娘』か何か特別に教えていたいただきましたね。同じころ、研究生としては異例の大抜擢で『ノヴァボサノヴァ』のショーの場面のドアボーイの役で舞台に出されたんです。それ以来この役はスターへの登龍門と言われているそうで、歌劇団が早くこの子を育てようとする、この役をあてるようですね」

麻実さんは宝塚に入団して十年で雪組トップの座に就き、それから五年後に退団し、女優として更に花やかな道を歩み始める。

「トップになったときに男役として一番美しい時に降りたいと思っていました。青春を謳歌させていただいたので、先の事は考えずに退団届けを出しました。そして、舞台はもう

これでいいかな、と思つていたら、東宝からミュージカル『シカゴ』に主演する話が来て、おかげさまで再演を含めて一年間『シカゴ』づくしでした。これでもいいかと思つてたら今度は松竹から『マクベス』の話が来て……。その仕事を一生懸命すると、良い作品、やつてみたい役が次々と待つていてくれて、本当に幸せですね」

おつとりとこんなせりふが出るのも麻実れいならばこそ。舞台映えのする派手な美貌と、スラリとした長身と、澄んだ声と、性格のよさと……総てが舞台人としての「花」につながる。

これだけの持ち札が揃つていれば宝塚入學式の遅刻も、踊りの試験も、悠々としてっこり通過できたらう。（この項つづく）

「会いたい人」シリーズが一冊にまとまり、関谷子著『舞台の神に愛される男たち』（1900円＋税）としてこの八月、講談社から刊行されました。

女房の聴聞し候に、戒をたもたせ候をやぶり候わんずればとて、たもつとも申し候わぬは、いかが候べき。ただ聴聞のにわにては、一時もたもつと申し候が、めでたき事と申し候は、まことに候か。答う。これはくるしく候わず、たといのちにやぶれ候とも、その時たもたんとおもう心にて、たもつと申すはよき事にて候。

法然上人「百四十五箇條問答」

ある女性がお説法を聴聞していた時、「戒律を守ると誓いますか」と尋ねられました。守り通せると思えなかつたので「誓います」とは答えなかつたそうです。これはいかがなものでしょう。お説法を聴聞している場では、その時だけでも「守ると誓います」と答えるのが尊いといわれているのは、本当でしょうか。

お答えします。そのように答えてさしつかえはありません。たとえ、後に戒律を守れないことがあると、説法の間では戒律を守ろうと心に誓つて、「守ります」と答えるのはよいことなのです。

あの時、確かにそう誓いましたよね

どうしたって筆が重い。でも、やっぱり書き残しておきたい。ところどころ説明や叙述を省くことになろうが、あらかじめお許しを請うておきたい。

そう、あれはとある金曜日、何度も電話がかかってくる午後だった。ひとつ長電話を切ったところで、またベルが鳴った。「またかよ」と再び受話器を取る。今度は、緊張した若い男の声だ。M家の息子さんだった。

電話の内容は父親が自宅で亡くなっていたこと、しかるべく調べたところ病死であったこと、推定死亡日時はいついつだと伝えるものだった。そして、ついでには菩提寺と葬儀の相談をしたいという。何はともあれ、駅向こうのM家宅に駆けつけた。息子さんと奥さんが待っていた。

Mさんは還暦を少々過ぎていた。早期退職か、定年か、五十代半ばでリタイアした。同じ頃、Mさんは亡きご両親が住んでいた実家を改築した。一つの決断であったのだろうが、ある時点からMさんは第二の人生を事実上、改築した実家を新居にプチ一人暮らしを楽しむ方向にシフトしたようであった。もっとも、それがかねて本人が希望していたことであつたかどうか、私には分からない。

真面目を絵に描いたようなMさん。お寺の行事にも欠かさず参加されていた。そんなMさん、数年前から家の中で大型犬を飼いだした。溺愛したという。と

ころが犬の散歩の途中、転んで怪我をした。それからだろうか、お寺からも足が遠のいた。お盆でお伺いするたびに、少しずつ覇気が薄れているように思えた。そして件の金曜日、出張で留守をした息子さんが二、三日ぶりにMさん宅の様子を見に訪れてみると、Mさんは居間で息絶えていた。そばには愛犬が寄り添っていたという。

ご尊父が亡くなった翌年、Mさんは菩提寺で剃度式を受けた。もうすぐ五十に手の届くころ、今の私と同じ年齢だ。その後、数年してMさんはリタイア、第二の人生を歩み出し、やがて一人で息を引き取った。傍らに愛犬だけが残った。でも、それがMさんの人生の結末だったのだろうか。いや、そんなことは断じてない。だって、奥さんも、息子さん方も、ご兄弟も、お孫さんも、ご親類も、みんないつもMさんを見守っていたのであるから。気にかけていたのだから。

それに、だ。十四年前の剃度式、Mさんは菩提寺の阿弥陀さまの前で誓っていたではないか。仏・法・僧に帰依すると。毎日若干遍、お念仏を唱えますか「よくたもつや否や」という住職の問い掛けに、「よくたもつ」って、確かに、そう誓っていたではないか。だったら、阿弥陀さまのお導きがあるはずだ。

冒頭のご法語は、戒律に関するお諭しではある。戒律をたもつかたもたないか、たもてないと思えても「たもつ」と宣誓することが尊いことだという。たもてそうにないから「たもつ」と宣誓しないのは、最初から諦めることに他ならない。自分をめぐる可能性を自分で勝手に見限ることになる。法然上人はそこを言いたかったのではないだろうか。

Mさん、あなたはお念仏若干遍「よくたもつ」と誓われた。ご尊父を見送ったこれからの自分自身に期待しつつ、この先の人生に希望を感じつつ、新しい自分のスタートのために、確かにそう誓われたんですね。念仏を唱えるということは、極楽往生を叶えようという阿弥陀さまのお誓いを信じ、自身の往生を勝手に見限らないこと。法然上人のお考えに照らせば、それは尊いことなんです。

Mさん、確かに阿弥陀さまのお迎えがありましたよね。人は誰だって弱いものです。尊い誓いを述べたあなたにお迎えがなくて、いったい誰にあるのというでしょう。そんな思いで、あなたを見送りました。いつか教えて下さい。私の慈悲の何たるかを。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第三十四回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

アルハイムハイム
「労働者の家」の視察へ



思わぬところから視察の誘い

渡辺海旭が下宿に帰ると、同室の萩原雲来がパーリー語の經典と格闘しているところだった。今晚の、救貧活動をめぐるキリスト者、社会主義者、自由主義者との議論について、雲来に意見を求めようと考えたが、思いとどまった。

「こんな遅くまで一体全体何をしていたのだ。また異教徒や主義者たちと酒を酌み交わしてオダを上げていたのか。そんなことのために宗門はわれらをロイマン先生の下へ送り出したのではないことぐらい君も自覚しているだろうに」と説教されるのが目に見えていたからだ。

雲来の指摘は指摘で尤もだし、海旭も内心忸怩たる思いを抱いてはいたが、しかし、海旭には今晚の議論が自らの将来にとってとてつもなく貴重だという直感があった。とりわけ、別れ際に救貧活動の手本になるかもしれ

ないと言われた「労働者の家（アルバイテルハイム）」という言葉が気になってならない。この目で確かめてみたい、という衝動を抑えることができなかった。

そんな海旭の希望がかなえられる日が、早々と、それも思わぬところからやってきた。居酒屋でドイツ人の議論仲間から日本の救貧制度について尋ねられたとき、助けを求めた高等文官試験合格組の官僚留学生在が訪ねてきて、「『労働者の家』視察」に誘われたのである。海旭は本意をつかみかねて訊き返した。「貴兄が『労働者の家』に関心があるとは、またどうしてなのか。たしか、日本には恤救規則という法律があるが、それは貧民を救うためではなく、一等国としての体裁を整えるためだ、いま我が国には貧窮者に手を差し伸べる余裕などないと言ったではないか。それなのになぜ……」

高文官僚の答えがふるっていた。

「国は形だけで、救貧・防貧は国以外の人々

がやってくれば、一石二鳥、いやそれで諸外国から一等国と見られるなら一石三鳥。君たちの議論を横で聞くともしに聞いている、どうもその手がかりが『労働者の家』とかにあると直感し、本国の内務省に照会すると、しっかり研究せよとのお達しが出ましてね。そのうち日本大使館から連絡が入り、ビーレフェルトにその『労働者の家』とかがあるというので、早速に視察を依頼した次第です。どうです、同道されませんか、貴重な情報をいただいた御礼です」

あの夜は議論に熱中して気づかなかつたが、この高文官僚も新酒（ホイリゲ）に誘われて河岸を代えたところ、また海旭たちと一緒になつたらしい。思わぬ展開だった。高文官僚の関心の出所は海旭のそれとは真逆だったが、ちよと近々仏学会がベルリン大学である。ビーレフェルトならその途次だから寄ることができる。海旭は誘いをありがたく受けることにした。

ビーレフェルトの社会実験

旬日して海旭は高文官僚に従って、ストラブルクから列車で北へ半日の旅程にあるビーレフェルトへ向かった。ノルトラント・ヴェストファーレン州の中心地で、繊維産業で急成長している工業都市である。ビーレフェルトの鉄道駅前で、旧知の駐独日本大使館書記官と社会保障が担当というふれこみのドイツ帝国の内務官僚が待ち受けていた。

連れて行かれたのは、ドイツの都市の郊外でよく見かける、小ぢんまりした一戸建てが立ち並ぶ住宅地区だった。手入れの行き届いた中庭と涼風にはためく洗濯物からドイツの中流家庭の質実な暮らしがしのばれる。

「これが『労働者の家（アルバイテルハイム）』、ですか!」海旭はいささか拍子抜けがしてつぶやくと、おなじく拍子抜け顔の高文官僚と顔を見あわせた。

ドイツ人官僚はうなずき返すと、慇懃な解

説口調で言った。

「何の変哲もない平凡な家々に見えますが、実は救貧活動に熱心な保守系プロテスタント団体のリーダーが仕掛けた、社会保障政策先進国ドイツにおける社会実験の一つといってもいいでしょうね」

ドイツ人官僚によると、その仕掛け人とはフリードリヒ・フォン・ボデルシュヴィング（父）といい、海旭が渡独した十五年前の一八八五年に「労働者の家」協会（フェライン・アルバイテルハイム）を設立、ここビールフェルト近郊に地所を買い求め、「労働者の家」八棟の建築に着手したのだという。

「ほう」と日本人官僚は疑念の晴れない面持ちで、メモを取る手をとめてたずねた。「で、いったいどんな社会実験なんですか、これは」ドイツ人官僚は大学講師然とした口調で説明を続けた。

「ボデルシュヴィングはキリスト者団体の指導者として、こう考えたのです。工業化によ

る急激な経済的發展で流浪する貧困者が続々と生み出されつつある。旧来の救貧や慈善事業ではこれに対処できない。対処できないどころか、それが逆に社会主義を助長させる一方でキリスト教会の影響力を低めている。これではキリスト教精神を危うくし、ひいては国をも危うくする。では何をなすべきか。農村から都会へ仕事を求めて続々と人がやってくるのに、住む家がそれに追いつかない。仕事にあぶれる人もでる。仕事を失うと住むところを失い、次の仕事を得にくくなり、流浪化する貧窮者がますますふえる。この悪い循環を断ち切らねばならない。それには、仕事にいそしめる家がなければならぬ。仕事を失っても家を失わないようにしなければならぬ。そこで「労働者の家（アルバイテルハイム）」の建設こそが最優先されるべきだと。それがわがドイツ帝国とドイツ皇室の安寧と繁栄にもつながる。そう思ったのです」

にわかに日本人高官の顔が明るくなる

のをドイツ人官僚は見逃さなかった。「これがボデルシュヴィングの持論の証拠物件です」といつて手にしていた資料をすつと差し出して続けた。「彼が『労働者の家』という社会実験をはじめるにあたって、時のフリードリヒ皇太子にあてた手紙です」

高文官僚が受け取った手紙の控えをと思しき資料を海旭も覗き込んだ。そこには、こう記されていた。

「この先三十、四十年の間に、いかなる勤勉な工場労働者も、ささやかな住居をもち、彼ら自身のリングの木の下で、家族に取り囲まれて夕食をとるといふようになれば、社会民主主義は死に、ホーエンツォレルン家の治世は百年の盤石を得るでしょう」

日本人官僚は、大いに元気づけられたらしく、「ほう、これは地味ではあるが、わが皇国の弥栄にも大いに資するものがある」

ドイツ人官僚は「いやいや」と首をふった。「残念ながら、着想はよかったのですが、所

詮は壮大な社会実験にすぎなかったというべきでしょう」

さっぱり合点のいかぬ日本人官僚は海旭へ視線を向けて同意を求めた。そこへドイツ人官僚が謎をかけた。「口で説明するよりも現実をもつて示したほうがいいでしょう、ベルリンに無残な証拠があるので、そこへご案内しましょう」

再び「赤いベルリン」へ

謎をかけられたまま海旭と高文官僚はベルリンへと向かう車中の人となった。帝都へはビーレフェルトから急行で五時間ほどの旅だった。帝都の鉄道玄関口レールテ駅前で待ち受けていた馬車を駆って市央へ向かった。どこへ連れて行かれるのだろうか、窓外に視線を泳がせていた海旭は、遠くに黒茶けたコンクリートの箱が林立するのを見て、「これは見かけた風景だぞ」とつぶやいた。忘れもしない、三ヶ月ほど前に仏教会の帰りにこ

を訪れ、救貧活動をめぐる論争のきっかけとなった場所だった。

海旭は思わず叫んだ。「ここは、ひよっとして『赤いベルリン』ではありませんか」

ドイツ人官僚は驚いて返した。「象牙の塔で高邁なる聖典と取り組まれている学僧が、わが帝国の恥部であるこんな掃き溜めをご存知とは……」

それまで三人の驥尾につき従っていた海旭だったが、馬車を降り立つや、異臭を放つごみためを見るように遠巻きにして立ちすくむ三人を引き立てるようにして、『赤いベルリン』の中へと入っていった。

三月前に海旭を招き入れてくれた子供たちの家族はどうなったろうか。部屋を訪ねあてると、汚れ具合はそのままだが住人は変わっていた。元の住人の所在を確認する海旭に、おそらく夜勤の仕事に備えてなのだろう、残飯が散乱する床の上に半裸で寝ていた男が、もっそりと半身をおこした。「仕事をなくし

て、子供と病人のばあさんを連れて夜逃げ同然に出て行ったよ。まあ、明日はわが身だがね……」と応じると、体を床に戻していびきをかきはじめた。

あのあどけない子供たちは奉公にでも出されたのだろうか。海旭は渡辺の家が傾いて口減らしに寺に出されたときのことを想った。が、海旭の沈思は、鼻をつまんですえた臭いに耐えていた日本とドイツの官僚の異口同音の叫びで破られた。

「ここではまともな議論はできない。早く外へ出よう！」

海旭としては半裸男が目覚めて先の住人の安否を確認できるまでいたかったが、やむなく彼らの提案に従った。『赤いベルリン』から臭いのとどかないところまで撤退すると、日本人官僚がふーっと深いため息をついて言った。

「いやあひどい。これがわが日本がお手本にしている近代国家の実態ですか」

「わが国では、鉄血宰相を戴いてから、また彼が引退してからも、爾々と社会保障政策を推し進めてきたのです。」

ドイツ人内務官僚は、冷静さを取り戻して解説をはじめた。それによると、一八七〇年代、ドイツは工業化で急速な経済発展を遂げるが、労働者の都市集中によって貧窮者が増え反政府の社会主義運動が高揚。これに対して、一八八一年には労働者災害保険法案、一八八三年には疾病保険法を制定。後者は労働者が三分の二、雇主が三分の一の保険料を負担、病気で働けなくなっても労働者は無料で治療を受けられる上に疾病手当が支給されるというもの。さらに一八八九年には老齢・疾病保険法制定。これは七十歳に達した労働者には老齢年金、労働能力を喪失した労働者に対しては廃疾年金が支給されるというものだった。

日本人官僚は眉根を寄せて訊き返した。「それだけやっても、赤いベルリン」ですか。

「いったい理由はなんなのですか」

「一言でいうと、仕事を求める労働者の都市流入に社会政策が追いつかないのですよ」

ドイツ人官僚は肩を落としてそう答えると、官僚らしく数字を示して補足した。ドイツでは、社会保障政策をうちはじめた一八七〇年から今までの間に五千人以上の「都市」に住む人口は凡そ一千万人から三千万人と三倍へ、十万人以上の大都市の数は八から四十八と六倍となり、全人口に占める比率は五%弱から二〇%超になったというのである。

「なるほど」と日本人官僚は言った。「ビーレフェルトの『労働者の家（アルバイテルハイム）』はいわばお遊びの社会実験。『赤いベルリン』という現実の前には焼け石に水というわけですか」

ドイツ人官僚は彼方に聳える黒茶けたコンクリートの箱を指差しながら、「あの『赤いベルリン』こそが現実世界の『労働者の家』なんですよ」

日本人官僚は頭を抱えてため息をついた。

「日本もいずれこうなるのか。しかし、ドイツがここまでやっても焼け石に水だとしたら、どうすればいいのか…」

海旭は、日独の高級官僚のやりとりを黙って聞きながら、違和感を覚えてひとりごちた。

「どうも、どこがちがう…」

ドイツ官僚が聞きとがめて訊き返した。

「なにがどこがちがうのか？」

「ドイツの友人からお手本にしたらと言われた『労働者の家』が、です。どうも連れて行ってもらったビルフェルトの『労働者の家』とも、もちろんこの『赤いベルリン』とも…」

「それを誰から…？」とドイツ官僚。

「社会民主党員です」と海旭が答えると、ドイツ官僚は何かいやなものを聞いたというふうに顔をしかめ、しばし思案した。「だったらそれは、やつらの互助組織かもしれない」海旭は目を輝かせて言った。「そこへ案内してもらえませんか」

ドイツ人官僚は気が乗らないそぶりで応じた。「ベルリン市内にもあったはずだ。入口までならご案内しよう。そこから先の段取りは君たちだけでつけたまえ」

(この項つづく)

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門
古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)3842-1289
振替00180-2145231

法然上人を
めぐる人々

極樂に
歸つた
法然上人

挿画・佐野芳朗

石丸晶子

◆
第五回
◆



十三

黒谷の叡空の弟子となつて、いつしか二十五年が経っていた。

瞳に一途な決意を秘めて叡空の室の前に立つた十八歳の青年僧は、四十三歳の壮年僧になつていた。

承安五年の春も半ばであつた。春とはいえ旧暦であるから温かいという季節ではないが、寒さの厳しい叡山でもあちこちに雪解けの音が聞こえ、真冬の間は凍っていた谷川のせせらぎの音も聞こえはじめた。

遠く近く野鳥のさえずりも聞こえている。昨日初めて法然は鶯の声を聞いた。

「さあ、昨日の続きを読まねばならぬ」

朝の勤めをすませると法然は経机に向かった。善導大師が『観無量寿経』を注釈した『観経疏』『散善義』が昨日読み終わつたところまで開かれたままになっている。

一心に専ら弥陀の名号を念じて 行住坐臥に、時節の久近を問わず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく。かの仏（阿弥陀如来）の願に順ずるが故に。

何気なく彼はそこを読み進もうとした。

と、ハツとして法然の目はそこに釘付けになった。時々刻々いつもいつも念仏を唱えて決して口から捨てないこと。これによって往生は決定する。観無量寿経を釈して善導はそう述べていた。

「おおーッ」

全身がその箇所に釘付けになつたように法然は絶句した。

（これだ。この道があつたのだ。万民救済の、しかも平等の救済の道があつたのだ！）

（なぜだ。なぜ今まで気付かなかつたのだ。万民救済の道が用意されていたのに！）

それはまさに電光石火。実存覚醒の一瞬で

あつた。

法然は今まで知らなかった全く別の世界に連れ出されていた。

それは、後戻りしたくとも出来ない絶対的覚醒であり、今まで知っていた古い世界とは全く別の新しい世界と人間への深い覚醒でもあつた。

その時、闇の世界の彼方が薔薇色に輝いて見えた。

餓えに苦しみ、父を、母を子どもを、戦乱の巷で失った人々……。さらには仏の教えからさえ見捨てられて今生と来世への望みを失って巷をさまよう人々……

彼らに一刻も早くこの福音を伝えなければならぬ。

精神の夜明けとともに法然の心を襲ったのはこのことであつた。叡山の麓では平家の栄華をよそに、仏教から社会からも疎外された人々の嘆きが、満ち満ちているはずであつた。

早々に師僧叡空の許しを得ると、法然は山を下りた。そして、弟弟子の信空から紹介された遊蓮房円照という善導流念仏聖を訪ね、ほどなく東山吉水のほとりの草庵に住むことになった。

遊蓮房は、のちに法然が「浄土の法門と遊蓮房にあえるこそ、人界に生を享けた思い出であつた」と述懐している信空身内の聖である。

ところで、承安から安元、治承にわたるこの日々が平家全盛の世であつたことを忘れてはならない。この平家全盛時代、叡空の死後ほどなく法然上人の一番弟子となる信空は、平家中枢に身内を持っていた。

平家女性のなかで清盛の妻時子に次いでナンバーツの地位にあり、なかなかのやり手であつた藤原領子（とうげのりこ）が、信空の伯母であり、しかも二人は義姉弟でもあつたのである。系図を見ると二人は或いは一緒に育ったとも考え

られ、そして成人後領子は「平家にあらずんば人にあらず」と豪語したこととせられる平時忠の後妻に納まっていた。

時の権力者と近親関係に信空がいたことが、山を下りた法然上人の教えが貴族社会のボイコットを食らわずに、庶民のみならず、平家や皇室の人々そして社会の各層に、新しく浸透していくのに役立ったと思われる。

山を下りた法然上人にまず、今をときめく平家や皇室の好意がなかったならば、庶民層にもみ教えは広まっていかなかったであろう。平家や皇室に忌避されたならば、叡山を下りた段階で、御教えの社会への浸透は挫折していたにちがいない。

十四

法然上人が山を下りたこの日から浄土に帰られるまでの三十余年間のうちに、平家一門は壇ノ浦で滅亡した。鎌倉には幕府が樹立さ

れて古代に幕が下ろされ、中世という新しい時代がはじまっていくという、それは激動の三十余年であった。

そしてこの間、法然上人にとっては旧仏教側の嫌がらせや妨害があったとはいえ、口称念仏の教えは平家滅亡後も社会の各層に、特に庶民の間に広がっていったのである。

そのような中でいわゆる「安楽住蓮事件」が起き、法然上人は讃岐へ、親鸞は越後へ流されたのであった。

その法然上人と親鸞に赦免の宣旨が下ったのは建暦元年（1211）十一月十一日。しかしすぐ洛中に入るのは許されず、上人が東山大谷の草庵に入ったのはその年の暮れであった。

上人はもう七十九歳である。高齢に加えて長年の流人生活であった。加えて年が明けると早々に風邪を引かれていた。弟子たちの目にも上人との別れが近いことが感じられ、法



然上人以外の誰も慌てていた。

（このままお上人様とのお別れがきてしまつては、われらは一体どうなるのであろう。だが教団をまとめ導いてくれるのか。第一、法然上人様の御教えを過たずに一体誰がわかっているのか……）

——法然上人との別れは悲しい。何としてもわれらの間に長く留まっていたただかねばならぬ。しかしそれが叶わぬならば今後どうやっていけばいいのか。

口にこそ出さないが、弟子たち一人ひとりの思いはこのことであつた。弟子たちは替わり合い、終日終夜法然上人の枕辺に侍していた、

京の冬は寒い。その日は朝から小雪がちらついていた。

早朝から枕辺に侍している法蓮房信空と交代しようとして薬湯を持った勢観房源智が入ってきたかすかな音に目覚めた法然上人は、そこに二人の弟子をみとめて微笑された。

「御房たちも休まれよ」

と力なく咳き込みながら上人は、

「私の病をそなたたちにまで移してはならぬ」

「何を仰せられます。わたくしたちは皆、お上人様あつての者たちでございます。薬湯をしっかりと飲みくださいませ」

信空がいった。

「夢を見ていた」

信空に答えるともなく、法然上人はつづけた。

「大きな深い川があつた。後ろからは敵の軍馬の音が近づいてくる。人々は恐れ、味方がいる対岸に渡ろうとひしめき合っていたが川浪が高く、辺りは嵐でだれも向こう岸にいけないものが居ない。とその時、人々が向かいいたともかく対岸から思わぬ速さで大きな船が迎えにやって来たではないか。人々は我先に船に乗り込んでいた……」

「不思議なゆめでございます」

源智がいった。「何か考えさせるような」

「いかにも意味深い夢よ」

法然上人は答えると、

「そなたたちにもこの夢の意味が分かるであらうな」

「意味するところかどうかは分かりませぬが、敵がうしろから攻めてくるときに、味方から迎えの船が大挙してやってきたとはありがたいことにございます」

生真面目な性格の信空はいった。

「おお、そこよ、その有難さよ。生き死にの海でおぼれかかったわれらを弥陀が念仏の力によって西方浄土に迎え入れてくださる。今朝方見た夢はまさしく、その夢であった」

十五

法然上人危篤、のうわさに弟子たちばかりでなく、大勢の庶民たちが大谷の草庵の軒近くまで押しかけてきた。法蓮房信空や勢観房源智をはじめ善慧房証空、心寂、隆寛、信寂

房、湛空……そして名もない庶民たち。

公卿平基親の姿もあった。

雪もちらつく冬の寒空の中、人々は手を合わせて念仏を唱えている。

知らせを聞いて都近辺の多くの弟子たちも草庵に集まってきたのだ。

ここ数日、法然上人はうとうとしたままである。

そんな中で上人は多くの夢を見ていた。

夢の中には父が居た。母も幸せそうに微笑んでいる。ガキ大将の幼馴染太郎助や三郎もいた。

…道を求めて苦悩した二十五年の歲月…。

本曾義仲の軍隊が京に乱入し、平家が隠れ潜んでいるのではないかと、法然上人の草庵まで踏み荒らしていったこと…

—そういえば、あの日一日だけは經典を紐解くことができなかった…

それから一人ひとりの弟子たち……夢には弟子の津戸三郎や大胡実秀など関東の御家人

や、式子内親王の姿もあつた……

式子に懇々と浄土の教えを論していると思つてふと目覚めた法然上人は、うつつともゆめとも分かちがたい心で、目であたりを見回した。

「おめざめになられましたか」

傍らに控えていた源智がいった。

「内親王にお会いしていた」

法然上人は言った。

「式子内親王でございますか」

「そうだ、浄土の法門を種々お尋ねであるのでお答えしていた。お姿が見えぬがもうお帰りになつてしまわれたか。そなた、後を追つてお見送りせよ。失礼があつてはならぬ」

夢うつつのなかで上人は源智に命じた。

「賀茂の斎院にお帰りになったのであらう。

お見送りせよ」

かさねて上人は言った。

内親王はもう九年前に他界。浄土で法然上人を待つてゐるはずの人であつた。

不思議なことだと思ひながらも、素直な源智は草庵の外に出、賀茂神社への道を途中まで追いかけたが、それらしい人影は何処にも無かつた……。

それは確かに夢であつた。

源智は上人と内親王との深い絆を改めて思ひながら草庵に戻つていった。

(つづく)

第四十六回

江戸を歩く



牛込から
早稲田へ

森清鑑
大江戸ウォーカ―

あることは間違いない（夏目坂、早大理工研究所）。漱石は養子となり、塩原金之助として一時内藤新宿で育つ。二十二歳で再びこの生家に戻った。晩年、漱石は、宗参寺南に住む（早稲田南町）。「漱石山房」と名付けたこの家には芥川龍之介ほか多数の弟子が出入りする。ここでの九年の間に「こころ」、「三四郎」など代表作を執筆。そして「明暗」執筆中に体調を崩し、大正五年、五十歳でこの地に没する。

穴八幡

三叉路に戻って、ちょっと行くと小川が流れている。この小川は、西一帯を占める、広大な尾張殿抱え屋敷の大池（御泉水）とつながっている。橋を渡ると四辻（よつじ）比較的に広い、この四辻を馬、町民、武士が行き交っている。そして左前方一帯がこんもりとした森。高田八幡（通称、穴八幡）である。

道沿いに立つ総門を二、三名の武士が潜っ

ている。右に転じて左の放生池を見下ろしながら段々を上る。登り切ると立派な楼門。その先は広い境内。松や菩提樹が林立。大勢の参拝客が訪れている。正面に拝殿と本社。江戸時代の正式名は、高田八幡宮だが江戸っ子は穴八幡と言った方が早い。古くは源義家が奥州凱旋の際、兜、太刀を納め八幡宮を祀る。江戸寛永時に別当法生寺建立工事の際、横穴が見つかり、その中から阿弥陀如来像が現れる。以来、穴八幡宮と呼ばれるようになった。この話を伝え聞いた家光は幕府城北の総鎮護に定め、八代吉宗は世継ぎの病氣平癒のため流鏑馬を奉納。ここから高田馬場と不即不離の関係が生まれる。もともと江戸庶民にとっては、虫封じの祈祷や冬至の際の「二陽来復」祈願信仰の方がなじみ深い。この風習は現代も続いている。

尾張中納言下屋敷

穴八幡西隣から広がる広大な屋敷が、尾張

中納言六十二万石の下屋敷（抱え屋敷）である。その広さは、下屋敷八万五千坪、抱え屋敷五万坪余に達する。庭の中央に御泉水と称する大きな池があり、弁財天も祀つてある。池の東に流れ込む水流（小川）は、早稲田村（早稲田中学、早稲田大学）とつながり、池の西口から大久保村方面に流れ下る。屋敷の表御門は、南に位置し、御門の先は、広大な御殿。俗に戸山屋敷という。各所に溜池もあり、御馬場を備え、五重塔、天神宮、絵馬堂、王子権現、葉師堂、水神が祀られ、臨揺亭などの四阿が建ち、一大庭園を成している。丘には桜林もある。これが市ヶ谷の上屋敷に対する下屋敷なのである。これだけの景観がそっくり残されていたなら、大庭園として東京の一大名所になっていたことであろう。ところが時代の変遷とは無慈悲なもので、明治になるとそっくり一掃され、平地化され、広大な陸軍戸山学校練兵場、校舎、陸軍音楽学校になってしまった。現在は国際国立医療セン

ター、公園、学校（早稲田、学習院、戸山高校など）として生きている。

早稲田の森、高田富士

再び穴八幡前の四辻に戻ろう。その中央に立つて今度は右前方を見ると、宝泉寺、高田稲荷、高田富士などが寄り集まった、こんもりとした森、自然の景観。校歌に詠われる、いわゆる早稲田の森とはこの辺りを指しているのでは無かるうか。木々の間に小高い段状の丘が幾つも迫り上がり、社と物見場所が一体化している。守宮池いもりいけもあり、独特の優美な景観があった。この景観を見下ろすように北側に聳えていたのが、何人もの絵師の手で描かれていた有名な「高田富士」であ



◆江戸名所図絵 総門潜って右の階段を上る。右下、四辻。右下へが宗参寺、右が馬場への方向

る。江戸中期以降、富士信仰の隆盛とともに各地に富士塚が造られ、富士山に行けない人々が、人工富士に登り、本物の富士山に向かつて手を合わせた。高田富士がとりわけ有名なのは、数ある富士塚のなかでも江戸で最初に造られたものだからである。富士信仰はここから始まったと言って良い。それだけに一段と偉容を誇った。高田村の植木職人、高田藤四郎の作である。位置は、穴八幡の四辻を右に折れ、大学の方に行くと左手にあった。今の早稲田大学九号館あたりである。江戸期は、この高田富士の裏に松平和泉守抱屋敷があり、地続きで松平隠岐守、井伊直弼の抱屋敷があった。そして明治になると、この松平和泉守の屋敷が早稲田大学となり、隣の隠岐守の抱屋敷が大隈重信邸になった（現大隈庭園、大隈講堂）。高田富士に行く道の右側は下戸塚村の田で、ここに大隈重信の手で名門早稲田中学が誕生した（当時早稲田大学は東京専門学校）。学校の中を小川が流れている。

この流れが神田川と先ほどの尾張中納言下屋敷御泉水を結ぶ小川である。早稲田中学の隣は、犬飼邸となった。

高田馬場

今度は、穴八幡前の四辻を北に登る。左が穴八幡の森、右が宝泉寺の森。下戸塚村の畑を割る坂道を上っていくと、大きな馬場の中央に出る。東西に延びたこの大きな馬場が、高田馬場である。馬場の東西延長は六百〇七メートル。馬場の手前にはそれに沿って広い弓の練習場が設えてあった。馬場には松の木が仕切りのように並列。馬場の周



◆江戸名所図絵 右上高田富士

囲は、広い畑で、木々の間から富士山が眺望できた。まさに風光明媚。今では想像もできぬ美しき風景である。広重は的場の位置から疾走する二頭の馬と遠くの富士を描いている。弓場の広い芝にはところどころに幕が張られ、そこに莫産を敷いて武士の一団が座り、行き交う馬の走りを眺めている。雪旦が江戸名所図絵で描いた、この場の情景はリアルである。馬上の武士が掛け声もろとも疾走し、弓場では幾つもの的が立てられ、近くに弓矢が転がっている。松の土手前には、町民、武士が行き交っている。その手前には、茶屋があり、数人の客が飲み食いしている。

この馬場ができる前、ここは庭園であった。家康の六男松平忠輝の生母、高田殿が景色の良い眺望を楽しむために拵えた庭園である。高田の地名はここから来ている。その後、造られた馬場だから高田馬場。三代將軍家光が寛永十三年に馬揃いや馬術鍛錬のために拵えたものである。彼は、穴八幡に弓矢の守護神

を祀り、流鏑馬の神事をここで奉納した。それ以降、歴代の將軍が將軍になる度に流鏑馬を催し、天下太平を祈願した。ここはまた、堀部安兵衛の仇討ちの場として天下に名高い。



◆江戸名所図絵 高田馬場

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●部

〔特選〕 野球部の一団が来る草いきれ

池田 伊吹

中高生の一団が会社などか、これから球場に行くのか帰りか、これらはすべて読み手に任されている。「草いきれ」とあるが、私は帰りで、一団の汗くささがむんむんしてくるような、そんな気がするのである。

〔佳作〕 一人居の部屋に香焚く五月尽

佐藤 雅子

部屋割りをすんなり決めて夏の旅

東 保

子供部屋占拠している浮き袋

板倉 一宏

●岸

〔特選〕 湾岸に海月犇き沖荒れぬ

石原 新

東支那海で大発生した海月は、日本海沿岸に流れてくることが多いが、この頃では太平洋沿岸にも及んでいるようだ。これが吹き寄

せられるように岸边にひしめいている。沖は次第に荒れてくる様子である。

〈佳作〉

魚河岸の昼を静かに生ビール

南部 雅子

夜はみどり岸边に拾う瓶の蓋

長谷川 裕

岸近き段々畑花蜜柑

大西 明子

●自由題

〈特選〉

ただならぬ雷神に会う旅最中

佐藤 雅子

天気予報はさほど悪くはなかったのだが、旅の途中で次第に雲行きがややしくなってきた。と思っていると、急に雷鳴がとどろいたのだ。気候の変動の多い山岳部あたりへの旅なのだろうか。旅はまだこれからだ。

〈佳作〉

神域の微動だにせぬ蝦蟇蛙

小林 苑を

噴水や人より多き鳩の数

寺下 忠至

洗い髪肌痛きまで梳きこ返す

吉崎美和子



誌上句会〈編集部選〉

■部

木洩れ日の影深くなる夏庇
ボート部の声遠くして生ビール
父死にし部屋に首振る扇風機
訃報届く西日の部屋に金盞
日当たりのよい部分だけ夏の入り
頭部から割れて落ちたる名無し滝
部屋の窓出入り自由な親燕
羅のごった煮大部屋の演者
尾瀬に夏来れば混声二部の歌
人事部の机の角の夕薄暑

森 懐人
鳥羽 梓
斉田 仁
小林 苑
山内 桃児
内藤 隼人
石原 新
横山 文子
相崎 友恵
望月 亜郎

■岸

河骨の咲きし岸辺に夕日差す
朝もやの岸辺に立ちて苦吟行
幼な日に近し海岸鰯釣る
螢火のひとつは岸辺離れけり
岸辺にて五月の風に乾きおり
朝焼けの河岸にマグロと男らと
岸壁に見かけぬ漁船夏初め
対岸に善男善女いて薄暑
隅田川右岸の艇庫夏木立
赤子抱く忘我の岸の夏茜

佐藤 雅子
森 懐人
飯島 英徳
斉田 仁
鳥羽 梓
月島 駄々
寺下 忠至
工藤 掉
横山 文子
望月 亜郎

■自由題

アンテナに憩う雀や風薫る
枇杷とるに手頃な二階ありにけり
路地裏は声をひそめて額の花
緑陰の下の鏡のふかみどり
ビニールの葉に吸いつきし水草
鳥籠を抱いて夏めく神楽坂
夏燕浄瑠璃坂の仮住まい
べらべらとしゃべる男と水氷
いま死んだだけしき見えて昼寝かな
紅薔薇は黒ずみてなお君臨す
夏足袋や叱られてから考える
夢を見るための聴力夏の浜
梅雨に抱く膝っ小僧という小僧

森 懐人
三島 治
井口 葉
長谷川 裕
工藤 掉
鳥羽 梓
井口 吾郎
斉田 仁
内藤 隼人
月島 駄々
葉月 令
横山 文子
藤堂 保

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

阿経自由題

締切・二〇二二年九月二十日
発表・『浄土』二〇二二年十一月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

93

かい目

さっちゃんねネッ

かまち♡ふしろう



編集後記

月搜し葦の池に入り込む

岱潤

高校の同窓会の幹事を一緒にしていた友人が、三年前、突然脳出血を起こし、半身麻痺になってしまった。彼は左の脳をやられてしまい、当初右側が全く足も手も動かなくなってしまう。そして失語症もあり、健常者と話をすることを拒むようになってしまった。メールを使い時々ではあっても連絡を取り合ってきた事で、昨年から左手で描き始めたという絵をデータ通信で送ってくれたこともあった。今回地元のグループ展に出展したので、見に来ないかという連絡をもらい行ってみた。そこには思いもよらないく

らいすばらしいバステル画が二枚出展されていた。日本のどこにでもある海を望む棚田の夕焼けを描いた風景は、田の水、海の水、そして空、森といったものが実に細かく丁寧に描かれていた。またもう一枚の水辺を飛び出すカワセミの絵は、水滴の一つ一つを丁寧に描いていた。利き手でない左手でここまで描くには、キヤンパスの方を動かしながら描くそうだった。彼が言っていた。「仕事に夢中になっていけるけれど、もう我々の世代は次の人生にシフトを入れ替える時期なんだよ。経済活動ではなく、集中できる趣味を持つこと、それが永く生きるコツだよ。がんばるんじゃないんだよ、楽しむんだよ」。

雑誌『浄土』

特別・維持・賛助会員のの方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 北山大超(焼津・光心寺)
 加藤亮哉(五反田・専修寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光園寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 田中光成(町田・養運寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(岡岡・回向院)
 真野龍海(大井山・清浄華院)
 脇 博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)
 宮林昭彦(大井山・光明寺)
 山田和雄(諏訪・貞松院)
 (敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

彼の言葉には重みがあった。必死で死ぬまで仕事をやるなんて、実は馬鹿げたことで、晩年は自分の好きなことをやる。そうした生き方こそが生きる意味かもしれないと思った。
 (長)

編集チーフ
 編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

七十八巻九月号 頒価六百円
 年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十四年八月二十日
 発行 平成二十四年九月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒〇五〇〇一一
 東京都港区芝公園四丁目四番地内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八 六九四七
 FAX 〇三三五七八 七三三六
 振替 〇二八〇八二八八



泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

美味探訪

と、や魚新 赤坂

「と、や魚新」は、明治23年赤坂鮮魚店に始まり、赤坂花柳界の料亭への仕出屋を経て、京都「たん熊北店」で修行した山本正明氏が、昭和56年開業から店長としてカウンター割烹「喰い切りおまかせ料理」の料理を担っている。

魚の美味しさだけでなく、四季の心入れした美しい料理、全国の造り酒屋から厳選したお酒と揃えば至福の時間。

山本店長から伝わる「一客一亭」の精神は、これは高級でなく上質な日本料理の世界。毎朝、店長自ら築地市場に足を運ぶ鮮魚へのこだわりと、食文化を育む場でありたいと願っている山本氏の仕事の姿は美しい。

また、食の専門出版社の柴田書房の常連でもある。

赤坂界隈のビジネスマン、O.Lで満席になるお昼のメニューには、焼魚定食（1890円）や日本料理の全てが入っている炭籠弁当（2625円）がある。そして、最後にいただくデザートは自家製寒天のあんみつ、蓮粉を使った蓮和三盆餅は絶品。お土産に持ち帰りたくなる。



107-0052 東京都港区赤坂5-1-34クウォータービル1F 03-3585-4701

定休日 日、祝

11:30~15:00(LO14:00)、17:30~23:00(LO21:30)(土曜日LO20:30)

法然上人鑽仰会の

本

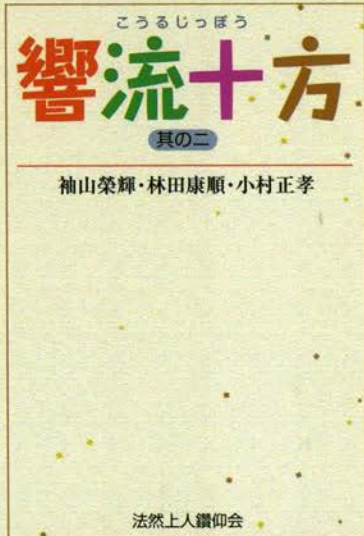
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
其の二
640円(税別)

響流十方こうるじっぽう
600円(税別)



在庫
僅少

月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より